

はじめに

情報社会学会会員の皆様

情報社会学会誌 Vol7, No2 をお届けいたします。

本号では、4本の原著論文とワークショップ報告書を掲載いたします。いずれも、独自性、新規性があり、情報社会学への貢献は大きいと考えます。

原著論文「「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する非許容・保留・許容」は、親しい者の前での「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する印象の持ち方について、その傾向を分析し、印象の持ち方の変容を論じたものです。豊富なデータを用い、経年変化を比較分析することで、複数の友人と共にいる状況での「ケータイのディスプレイを見る行為」に対する印象の割合に変化がある可能性を導き出し、権力論を援用して社会的意味を論じています。今後は、年齢層別などさらに詳しい分析に期待しています。

原著論文「国別トップレベルドメイン名の利用促進要因の推定と統治体制の特徴抽出」は、国別トップレベルドメイン名(ccTLD)の利用促進に関わる要因を論じたものです。ccTLDの登録数を従属変数、登録条件などの要因を説明変数として重回帰分析を行い、人口、一人あたりGDP、インターネット利用率などがccTLDの利用促進に影響を与えることを示しました。今後は、ccTLD管理運営者の責務に見合った説明変数を設定し分析されることを期待しています。

原著論文「Twitterにおけるバーストの生起要因と類型化に関する分析」は、バースト現象について定量的および定性的な分析を論じたものです。バースト時は通常時に比べ、リツイート(RT)の割合が高く、リプライ(@)の割合が低く、文字数が短いという特徴が見られ、さらに、最大震度と都心から被災地までの距離の短さがバースト生起に影響を及ぼすことを示しました。今後のさらなる研究の深化を期待しています。

原著論文「オンライン問題解決コミュニティにおける匿名(制/性)のポジティブインパクト」は、Activity Based Trust (ABT) をキー概念として、CMCにおける匿名性のコントロールによって現実では解決し難い問題に対する協働が発生する可能性があることを論じたものです。匿名性はネガティブな側面をもつが、相談サイトなどでは相談者の持つ文脈を可視化するための規範が形成される可能性があることを事例分析しています。今後、理論的な貢献、社会的、実務的な含意も含めたさらなる研究の深化を期待しています。

学会も早7年が経過いたします。知識共有コミュニティワークショップも第5回目の開催となりました。今後も会員皆様の積極的な研究活動に期待すると同時に情報社会学に関する多彩なご投稿をお待ちしています。

2013年3月25日

情報社会学会  
会長・編集委員長  
大橋 正和